

令和6年度 福祉体験作文コンクール優秀作品

このコンクールは、児童・生徒がボランティア活動などの体験を通し、感じたことや考えたことを表した作文を募集したものです。愛知県社会福祉協議会での審査の結果、一宮市から3編が優秀作品として入選しましたので、紹介します。

※令和6年度時点の学校・学年です。

「何事にも挑戦」

一宮市立富士小学校
6年 松本 奈々さん



私は、昨年の一宮市スポーツ協会表しよう式で小田凱人選手によるトークショーに出席しました。小田選手は、一宮市出身で九才の時に左あしこ関節の骨肉しゅと診断され、その後左あしの一部を切除する手術を行い、障害者となった話を聞きました。今まで私は、障害者の方と接する機会があまり無かったので、とてもショックを受けました。しかし、小田選手は、こうき心あふれ、ポジティブ思考でその苦しい時を乗り越えました。この夏開催しているパリのパリンピックの選手として出場しています。出場種目である車いすテニスとの出会いは、病院の先生から動画を観せてもらった時「かっこいい」と思ったこうき心から始めたそうです。現在、小田選手の活やくは、みんなを元気にしてくれています。もちろん、私も新聞などで優勝の記事を見つける度に、自分もがんばろうと勇気をもらっています。なので私も、苦しんでいる人、困っている人を助けたい。力になりたい。と思います。この夏休みから、看護師体験、認知症サポーター養成講座、こどもボランティアスクールへ参加する事にしました。

看護師体験で一番印象に残ったのは、患者さん一人一人に声をかける時の対応の仕方です。少し距りのはなれた高れいの患者さんには、大きな声でゆっくりと話しかけて気にながら、目の前にいる患者さんの治りようもしていました。患者さん達の不安や痛みを理解している姿に、看護師という職業には、治りようだけでなく患者さんの心に寄りそう奥の深さを感じました。それは、患者さんの人生を尊重し、話しやすい環境や関係性をつくることの大切さ、また、思いやりの心を持ち、信頼される看護師さんの姿を学びました。

認知症サポーター養成講座では、脳のしくみ、認知症の症状や予防、関わり方、ケアに関する内容までさまざまな事を教えていただきました。その中で、認知症当事者の方の体験談を聞く事が出来ました。その方は、十年前に認知症と診断された方ですが、見た目では、認知症かどうか全くわかりません。でも、認知症という事をかくさずに生活をし、周りのサポートを受けながら、毎日を楽しく生活してみえるそうです。認知症は、治らない病気ではあるけれど、進行をおくらせることは出来ます。なので、治りようしていく中でも、普通の生活が送れる事も知りました。もちろん、周りのサポートは必要です。おどろかせない。いそがせない。相手がいやだと思ふことは言わない。この三つを守って私も接していきたいと思います。認知症キッズサポーターとして、認知症について知らない人や間がうって理解している人に、今回学んだ事を生かして、伝えられたらうれしいです。

これから始まる、こどもボランティアスクールでは、障害者の方とカレを作ったり、車いすツインバスケットをしたり、街頭募金のお手伝いが出るので、とても、楽しみな気持ちと心が引きしまった気持ちで

いっぱいです。

今すぐには、人の役に立てる事は少ないかもしれませんが、障害や年れいに関係なく、みんなが笑顔で手を取り合える社会になってほしい。その力に私もなりたいと強く思いました。

「優しさから生まれる幸せ」

一宮市立北部中学校
1年 松原 弘将さん



僕には毎月、とても楽しみにしている便りがある。夕方学校から帰宅し家のポストを覗き、その封筒が入っているとうれしくて真っ先に封を開ける。それは祖母が入居しているグループホームから届く毎月の便りだ。入居している方々の日常がカラー写真でふんだんに印刷されている。僕はまず、たくさん写真の中から大好きな祖母の写真を探し、見つけた瞬間うれしさで自然と笑みがこぼれてくる。先月は折り紙で紫色の花を作ったり、おやつレクで皆さんと一緒に楽しそうにおやつを食べたりしている祖母の姿が写っていた。

僕の祖母は、僕が小学五年生の時に祖父が亡くなり、祖父の死後しばらくしてアルツハイマー型認知症を発症した。認知症は、その人にとって大切な人や物を失ったショックや悲しみから誘発されることも珍しくはないそうだ。

僕が小さい頃、祖母の家にいくと、いつもテーブルの上には祖母の手料理が溢れそうなく並んでいた。料理上手な祖母が作った食事を家族みんなで囲んで食べるのが僕は大好きだった。そんな祖母が認知症を発症したことを、初期の段階では僕達家族は誰も気づくことが出来なかった。祖父が亡くなってから一人暮らしとなった祖母は、僕達が遊びに行くと、いつも変わらず駆け走を作って出迎えてくれていた。本当にいつもと何ら変わらな

らず。祖母の異変を知らせてくれたのは警察からの一本の電話だった。家の中に不審者が居ると、祖母が電話したからだ。そして警察の方は祖母からの通報は、これまでも何度かあったことも教えてくださった。祖母の病状には初期の頃には波があり、僕達家族と一緒に居るときはいつもの明るくて料理上手な祖母だったが、一人の時間に寂しさを感じると見えな人や物が見え、認知機能の低下が現れているとのことだった。

その後、認知症を発症した祖母と、祖母を支える僕達家族を助けてくださったのは、地域包括支援センターの方々だった。家族が行けない日は訪問してくださる。父と母には認知症の方が入居するグループホームを紹介してくださった。グループホームでは認知症ケアや生活自立サポートが行われ、その中で毎日のように様々なイベントが開催されているとのことだった。

祖母が入居して初めて会いに行ったときは、コロナ禍だったため、オンラインでの画面越しの面会だった。直接会うことは出来ないけれど画面の中の祖母は、トランプをしたりお花見に行ったりしたことなどを楽しそうに話してくれた。認知症は脳の刺激が少なく進行が早まる可能性がある